

私達の目の前には大きな壁がある。それは簡単には壊れない頑丈な壁。しかし、人間の平和を願う心で壊すことができる。いつかその日が来ることを私は願う。

私が生まれ育った座間味村は、青い海と緑の山々に囲まれた小さな島だ。今、当たり前のようで見えている美しい景色も、かつては戦争によって、家が焼かれ、食料もなくなり、この青い海が血の海へと化してしまった。「戦争」という巨大な渦に巻き込まれた多くの人々が命を落としていった。そんなこの島の惨劇を、沖縄戦体験者である私の祖父は「みんなが協力して平和であり続けてほしい」という強い願いを込め、戦争を知らない私達に地獄の日々を語った。

今から六十七年前、島の上空は、米軍機におおわれ、次々に落とされる砲弾の中逃げまわる人々。祖父の家族も、暗い壕の中で息を潜めていた。そこでは、

「アメリカカーに殺されるくらいなら、自分達で死んだほうがいい。」

という考えから、あの惨劇、「集団自決」が起きたのだ。手榴弾で体を吹き飛ばし、カミソリで首を斬った人。また、祖父の家族は、毒薬を飲み死のうと考えた。それを飲むと一瞬のうちに死んでしまう。しかし、毒薬が手に入らず集団自決を免れた。もしもあの時、祖父が毒薬を飲んでいたら、と考えるとぞっとする。もしかすると私の存在はなかっただろう。

今でも、島のお年寄りには、体に深い傷を残し、心に大きな痛みを抱えている。そして、「戦争のことは思い出したくないさあ。でも伝えないと、同じことが何度もくり返されるからねえ。」

と、涙を浮かべながら語ってくれる。戦争で家族や友人を亡くしたこと、家が焼かれたこと、暗い壕の中で息を潜めたこと、山道を隠れながら必死に逃げたこと。ヤマモモを食べ空腹を満たしたこと。戦争は、体験した人にしか分からない痛みと苦しみだけを残しているのだ。

三月、座間味の山には赤く熟れたヤマモモがたわわに実り、島民達はその季節を毎年楽しみにしている。私もその中の一人だ。当時ヤマモモは、命を繋ぐ大切な一粒だった。しかし現在は一つの楽しみとなっている。

また、座間味には数多くの壕が残されており、今の私達は、「怖い」「幽霊が出る」という感情を抱いてしまう。だからといって、塞いではいけない。塞いではなくなったら、地獄の日々から目をそむけてしまうことになる。すると、同じ過ちを何度もくり返してしまうだろう。決して目をそむけてはいけない。「戦争」という辛い記憶を忘れてはいけないのだ。わずかな記憶から、あの地獄の日々を全身で感じ、伝えなければならぬ。私達が平和について考え、命の尊さを見つめていかなければならない。もう二度とあの地獄の惨劇を見てはいけない。それが今を生きる私達の使命である。

静かに目をつぶれば、戦場の光景が浮かぶ。笑っている人は一人もいない。目に一杯の涙を浮かべ、悲しみや苦しみが伝わってくる。心が苦しくせつない。そんな運命などどりたくない。そして、次の世代にも、こんな未来を見せてはいけない。だから、たくさんの人に伝えたい。

平和は、幸せや楽しさを一人で感じるのではなく、多くの人々と分かちあう、そんな時にやってくるのではないか。だが、人間はそれをどこかで忘れてしまった。幸せは、たくさんの人の死や犠牲を出して掴むのではなく、もつと身近にある。大切な家族や友人達と笑って話す時、元気な笑い声が聞こえてくる時。そんな小さな幸せを平和というのだろう。

今、目の前に広がる青い海を眺めながら、私は祖父の言葉を思い出す。一人一人が平和を願い、祈り、そして守ること。

私は祖父の思いと素晴らしい未来のために今の小さな幸せを幸せと感じ一日一日を大切にしていきたいと思う。